様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年　5 月　28 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007 年度　～　2009 年度
課題番号：19730451
研究課題名（和文）　小学校から中学校移行期における非行行動の縦断的検討

研究課題名（英文）　Longitudinal study of juvenile delinquency from elementary school to junior high school students

研究代表者
小保方　晶子（AKIKO OBOKATA）
白梅学園大学・子ども学部・准教授
研究者番号：00442088

研究成果の概要（和文）：
中学校で問題となる非行行動の発生の予測要因を小学校の変数から明らかにすることを目的として 3 年間の縦断調査を行った。小学校５年生から、中学校３年生までの 5 学年（小学生約 1200 名、中学生約 2300 名）を対象に質問紙調査を３度行った。小学校から中学校に移行期の問題行動の変化や、問題行動のリスク要因を明らかにした。非行のある子どもは、睡眠時間が短いなどの生活リズムの乱れがみられた。時間管理の困難さといった生活リズムの乱れは、問題行動の発展と関連していることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：
This study examined the risk factor that predicted the juvenile delinquency in junior high school student from the variables of elementary school period in 3 years longitudinal research. Questionnaires were administered to about 1200 elementary school students (5th and 6th grade) and 2300 junior high school students (1st~ 3rd grade) for three times. This study clarified how changed student’s problem behavior in the transition from elementary school to junior high school and the factor that associated with the problem behavior. It was clarified that the students who showed delinquency were more likely to have disrupted daily routines such as sleep patterns. These findings suggest that time-management difficulties are related to the development of problem behaviors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	600,000	3,900,000

研究分野：心理学
科研費の分科・細目：臨床心理学
キーワード：
(1) 非行　(2) 抑うつ　(3) 小学生
(4) 中学生　(5) 生活リズム　(6) 縦断研究

１．研究開始当初の背景

（１）小学校から中学校への移行に伴い、非行などの問題行動が増加する。中学校への移行に伴う問題の背景には、中学校になると教科担任制になり、教師と生徒の間に距離が出来ることや、教師の生徒に対する態度が威圧的になるため、信頼関係が築きにくいこと、自律性が阻害されることが指摘されている。一方で、中学生の問題行動の１つである非行については、小学校からの問題行動の持ち越しの問題が指摘されている。中学校で問題がみられる生徒の多くには、既に小学校の時点で何らかの問題行動がみられるというのである。

発達的側面から見ると、小学校高学年から中学校の間は、思春期にあたり、心身共に変化が大きく、様々な問題が出やすくなる。中学校への移行の問題には、学校システムが変わることに思春期への移行の問題が重なることが関連しているとの指摘もある。中学校で、非行行動が増加することから、問題行動の発生について、小学校から中学校への移行期を含めた検討が必要である。

（２）これまでに、著者は、中学生の非行傾向行為のリスク要因を明らかにするために、中学生約２０００～２５００名を対象とした調査を５回（うち４度は縦断調査）行った結果、非行傾向行為を「友人同調型」と「抑うつ型」の２つのタイプに分類することができた。友人同調型は、親子関係には問題があるが、友人関係は良好である。非行のある友人の影響が強く、友人への同調行動がリスク要因として働く。非行の開始時期は、中学校であることが多い。抑うつ型は、抑うつやセルフコントロールの低さの個人要因がリスク要因として働いている。親子関係の問題がより大きく、さらに友人関係も親密でない。非行の開始時期は、小学校であることが多い。抑うつ型非行の方が、対人関係や個人的問題が、非行が深化している子どもと共通していたことから、今後さらに本格的な非行に移行していく可能性が示唆された。

つまり、小学校から問題行動が見られる子どもの方が、青年期以降、問題行動が大きくなる可能性があるといえる。しかし、これまでの研究では小学校から問題行動がみられる子どもの中学校における非行行動の発生の過程は明らかになっていない。中学校で増加するとされる非行行動の発生を明らかにするためには、小学生から中学生への移行期を含めた縦断的研究が不可欠であると考えた。

２．研究の目的

本研究では、横断研究と縦断研究を組み合わせ、中学校移行期を含む小学校５年生～中学校３年生の５学年を対象に、以下の目的を明らかにするために、３年間の縦断追跡調査を行う。

（１）横断調査を行い、中学校への移行期にある子どもの非行や学校での問題行動などの外面的問題と、抑うつなどの内面的問題の発生時期を発達段階別に明らかにする。

（２）３年間の縦断調査行い、中学校で生徒指導上、特に問題となる非行行動の発生のリスク要因を小学校の変数から明らかにする。

３．研究の方法

（１）対象者　小学校５年生、６年生、中学校１年生、２年生、３年生の５学年、各学年５００名を対象に質問紙調査を行う。小学校は中学校の調査協力校の学校区に入っている学校に依頼する。

（２）質問紙の内容

①問題行動として、非行傾向行為、学校での問題行動、授業中の問題行動、出会い系サイトに関連する項目、親への暴力について設定する。内面的な問題として、抑うつについて尋ねる。

②生活リズムについて、起床時間、就寝時間、睡眠時間、携帯電話の使用時間、テレビの視聴時間、ゲームの使用時間、朝食、夕食、塾、部活動への参加等について尋ねる。

③身体的成熟について捉えるために、身長、体重を尋ねる。

④重要な他者との関係について、親子関係、友人関係、教師との関係を把握する項目を設定する。

⑤学校適応について、学校享受感を訪ねる。

⑥個人の要因として、セルフコントロール、共感性、向上心を設定する。

４．研究成果

2007 年度に、中学生 6 校約 2300 名、小学生 6 校約 1000 名を対象に、縦断調査の第 1 回目を行った。

2008 年度に、中学校 5 校約 2000 名、小学校 9 校約 1300 名を対象に、縦断調査第 2 回目を行った。

2009 年度に、中学校 6 校 2300 名、小学生

8校約1100名を対象に縦断調査の第3回目を行った。

（1）問題行動の変化

非行行動は、中学校2年生で増加する傾向がある。学校での問題行動は、小学校6年生で増加し、中学校1年生で減少し、中学校2で再び増加するプロセスがみられた。中学校で非行行動が増加するが、小学校でも非行行動以外の問題行動が多いことが明らかになった。中学校における問題行動の増加については、中学校の指導体制の問題が指摘されることが多かったが、小学校段階においても何らか不適応がある子どもたちが存在する。

また、内面的問題である抑うつは、全体的傾向として、学年があがるにつれ増加し、中学校で男女ともに抑うつの高い子どもの割合が増加していた。

（2）非行行動と生活リズムとの関連

非行や問題行動の経験のある子どもとない子どもで分類し、非行や問題行動と生活リズムや重要な他者との関係について明らかにした。

まず、睡眠との関連について、問題行動の経験のある子どもの方が、起床時間が遅い、就寝時間が遅い、睡眠時間が短いといった生活リズムの乱れがあることが明らかになった。特に、非行傾向行為、出会い系、親への暴力などの問題がより深化している行為の経験のある子どもや抑うつの高い子どもが睡眠時間が短く、問題行動の深刻さと生活リズムの乱れの関連があることが明らかになった。さらに、携帯電話の使用時間の長さやゲームの使用時間も非行傾向行為に影響しており、特に携帯電話の影響が強いという結果であった。

また、非行傾向行為と親への暴力の経験と、夕食を毎日食べているかが関連していた。これらの問題行動の経験のある子どもたちは、経験のない子どもたちより夕食を毎日食べないような生活パターンがあると考えられた。

中学生で非行のある子どもは生活リズムの乱れがあったが、小学校で問題行動が見られる子どもも同様の傾向があった。また、中学校段階になると、小学校と比較して、問題行動の経験の有無によって睡眠時間の長さに差がみられるものがより多くなっていた。生活リズムの乱れは、問題行動の発展と関連していることが示唆された。生活リズムの

本研究では、問題行動のリスク要因を明らかにした。これらの要因が明らかになることで、リスクの高い子どもに対し、早い時期の介入が可能になり、生活指導面等の学校現場での実践に活かすことができるといえる。

（3）3年間の縦断調査から

2009年度で、小学校から中学校移行期を含む3年間の縦断データが揃い、小学校から中学校に移行期の問題行動の変化、中学校における非行の予測要因を小学校の変数で明らかにすることが出来つつある。これまで、日本の青年心理学の分野において、問題行動の検討については、問題行動とリスク要因の相関を、学年ごとに比較するものが多かった。加えて、特にこの年齢に関する研究は、小学生の中での比較、中学生の中での学年比較に留まっている。

また、本研究の3年間の縦断調査で、調査開始時期に小学校5年生であった対象者が中学校1年生になっている。しかし、中学校3年生までの全てのプロセスを追うことは出来ていない。非行は中学校2年生で増加する傾向があることから、今後の展望として、調査を継続し、調査終了時期を中学校1年生から中学校3年生に延ばすことで、中学入学後に非行が開始された子どものリスク要因を、小学校から問題が継続している子どもと比較し明らかにできると考えている。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

小保方晶子・無藤隆．出会い系サイトなどを利用している中学生の特徴：従来からみられる非行傾向行為との比較、犯罪心理学研究．査読有り．2007．45巻61～73.

〔学会発表〕（計10件）

Akiko Obokata, Takashi Muto. Regulatory factors for mild delinquency of Japanese junior high school students:child-parent relationship, peer relationship, and self-control. American Psychological Association 115th Annual Convention, 2007年8月18日,San Francisco, California.

小保方晶子・無藤隆．中学生が行う家庭内暴力に関する要因の検討―非行傾向行為との比較から―．日本心理学会第71回大会．2007年9月19日．東京.

小保方晶子・無藤隆．中学校教師による生徒の問題行動を捉える視点．日本心理臨床学会第26回大会．2007年9月29日．東京.

小保方晶子・無藤隆．中学校教師による生徒の問題行動を捉える視点－小学校から中学校への移行期に注目して－．日本発達心理学会第19回大会．2008年3月19日．　大阪.

小保方晶子・無藤隆．中学生の問題行動と生活リズムとの関連．日本心理学会第 72 回大会．平成 20 年 9 月 20 日．北海道．

小保方晶子・無藤隆．中学生の問題行動と生活リズムに関わる要因との関連．日本発達心理学会第 20 回大会．平成 21 年 3 月 25 日．東京．

Akiko Obokata, Takashi Muto. Relationships between daily routines and problem behaviors among Japanese students, American Psychological Association 117th Annual Convention. 2009 年 8 月 9 日. Toronto, Canada.

AkikoObokata, Takashi Muto. Relationships between Sleeping patterns and problem behaviors among Japanese elementary and junior high school students. ＸＩＶth European Conference on Developmental Psychology. 2009 年 8 月 20 日. Vilinius,Lithuania.

小保方晶子・無藤隆．中学生の非行傾向行為の規定因－生活リズムと携帯電話からの検討－、日本心理臨床学会 28 回大会．2009 年 9 月 21 日．東京．

小保方晶子・無藤隆．問題行動と生活リズムとの関連－小学生と中学生の比較、日本発達心理学会第 21 回大会、2010 年 3 月 26 日．大阪．

〔図書〕（計 3 件）
無藤隆・小保方晶子．金子書房．子どもの発達危機の理解と支援　漂流する子ども．2007. 99～117.

小保方　晶子．中央法規出版．新・社会福祉養成講座　19　権利擁護と成年後見制度．「非行少年への対応」、2008、P210～P214

小保方　晶子．学文社．心理学ポイント・シリーズ　第 5 巻　発達心理学「逸脱行動が増加するのはなぜか」．2008，P90～P91.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小保方　晶子（AKIKO OBOKATA）
白梅学園大学・子ども学部・准教授
研究者番号：00442088
(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：